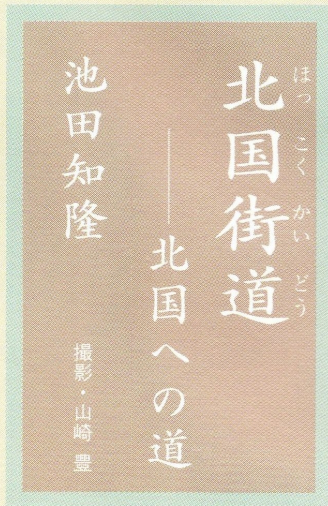




伊吹山

西日本の古道を歩く



北国街道の起点と終点は、かならずしも明確ではない。江戸幕府は、東海道など五街道を正式に定めたくらいで、他の街道名はさまざまな呼び方があった。古代、北国街道は京の都を離れ、北陸の日本海沿岸につながる道を指し、近世になると、中山道（中仙道）の鳥居本宿（滋賀県彦根市）から琵琶湖東岸部を北上し、長浜、木之本、栃ノ木峠を越えて板取宿から今庄宿（福井県今庄町）に通じる道となった。今庄宿で北陸道と結び福井、金沢、新潟へとつながる（中山道の関ヶ原宿から北に向かい木之本宿で合流する街道は北国脇往還と呼ばれていた）。その北国街道は、戦国武将、柴田勝家が北ノ庄の軍事道路として開いたといわれる。日本武尊が登ったという神秘さを今に伝える伊吹山（標高一三七七メートル）を後に湖北へと向かう道は、いやがうえにも戦国の世を浮かびあがらせる。

伊吹山は役行者が開き、奈良時代には山

腹に多くの寺々が建立された。が、一五七三（天正元）年、織田信長の浅井攻めのとき、兵火によって焼失した。JR長浜駅のすぐ西、湖岸に美しいたずまいを見せる長浜城は、豊臣秀吉の得意げな顔を思いおこさせる。いつしかNHK大河ドラマ「秀吉」の竹中直人の顔がチラついて、困ってしまうが……。

駅前のにぎやかな通りから一步入ると、北国街道は現代的な感覚とレトロが融合したおしゃやかな町並みに変身していた。武士や商人の往来で栄えた通りには、紅殻格子のどつしりとした町屋が軒を連ね、往時をしのばせる。明治時代の銀行を修復、復元した「黒壁ガラス館」には、かれんなガラス細工の人形や大小、さまざまなガラス製品がそろい、若い女性の人気を集めている。古い町並みとガラス文化を溶け込ませ、路面修景によって歴史の中に新しい伝統を生みだしつつあるようだ。

JR高月駅から東北へ歩いて十分の渡岸寺には、十一面観音像（国宝）がある。高さ一・九五メートル、官能的な美しさをたたえた一木彫の仏身だ。「何となくよかな、莊嚴な微笑をし、胴が心持ち左に曲がって色気あふれて、見ほれてしまう」と井上靖は、小説「星と祭」で書いている。

若い男女が貸しボートで長浜から出て、竹生島付近で転覆。死体は見つかからぬまま、長い歳月が経った。命日の夜、二人の親は船を出し、満月で照り映える湖面に花を投げた。湖中の霊への供花だった。そ



今庄宿



馬居本宿



栃ノ木峠の栃の木



賤ヶ岳より琵琶湖をみる

のとき、十一面観音の名を呼ぶと、岸に次々と十一面観音像が立ち現れ、経をあげると、消えた。湖中の二人は天にのぼって星になった、と若者の父親はいう……。

愛する者の死を受け止めるには、悲しむこと、そして祀ることしかない。そう思うことで親たちの互いのわだかまりが解け始めた、という物語だった。

湖上に浮かぶ竹生島は、弁財天の島、観音霊場として広く知られ、源平争乱のとき、平家の御曹司経正は、社前で琵琶を奉じた。「平家物語」にある。余呉湖には羽衣伝説があり、湖北を舞台上に水上勉は小説「湖の琴」を書いた。湖は、人間の孤独を描くには最良の舞台かもしれない。静まり返った湖面は、鏡のようにさまざまな心象風景を映しだす。

木之本町と余呉町の境にある古戦場、賤ヶ岳は、柴田勝家と秀吉が決戦した。加藤清正ら七本槍の武勇談を残し、「日本の始まりはこのときに候」と、勝家を破った秀吉が言った有名な話がある。

JR北陸本線から離れ、街道は山に入る。険しい栃ノ木峠だ。越前と近江の国境で、巨大な栃の木(天然記念物)が崖にのぞんでそびえている。さらに西北に位置する木の芽峠を含め、この周辺の山々は、北陸の主要塞であり、関門でもある。都へ攻め上る木曾義仲は、ここから平家をにらみ、喚声をあげ、やがて山伏に身をやつした源義経が弁慶を伴い、こっそりとおちのびていった。親鸞、道元、世阿弥、蓮如……

と都を離れ、ひたすら北国への道を歩む人が続いた。そして思索を深めていった。

栃ノ木峠を今庄町側に少し降りると、町が二年がかりで再現した宿場、板取宿がある。石畳に再生した旧道が続く。四軒のかやぶき民家は町が買い取り修復した。「妻入甲造り型」といわれ、雪深いこの地方独特の造りで、正面から見ると虚飾を廃した実戦本位の兜のような迫力がある。一軒は町資料館として活用、三軒は町外から転居してきた三世帯に維持管理を任せ、歴史をよみがえらせようとしている。

そして峠に立てばなによりも、織田信長の妹、お市の方の悲話が生かぶ。お市は夫、浅井長政が信長に滅ぼされたあと、三人の娘を連れてこの山道をたどり、柴田勝家に嫁いだ。しかし、信長亡き後、勝家は秀吉との争いに敗れ、三人の娘は、自刃した母をしのびながらこの峠を下った。その長女、茶々は秀吉の愛妾淀君となり、二女のおはつは京極高次(のちに福井県小浜城主)に嫁ぎ、三女の小督は徳川秀忠の妻になって家光を生み、徳川三百年に浅井の血を伝えた。「誰れの生涯が一番幸福であったかは、それぞれ当人に訊いてみる以外、早急には断じられぬものがあるようである」と記して、井上は長編歴史小説「淀どの日記」を終えていた。

北国と都、死と再生をめぐる多くの人々の夢と挫折。栃ノ木峠の巨木はいまも、そんな姿を見続けている。

(いけだともたか・ジャーナリスト)



竹生島

